

Title	深淵の思想：「幻影と謎について」に見る永遠回帰
Sub Title	Sein abgründlicher Gedanke : in gelesene ewige Wiederkunft
Author	岩下, 真好(Iwashita, Masayoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.138 (2017. 2) ,p.27- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説 『ツアラトウストラはこう言った』を精読する④
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000138-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000138-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ツアラトウストラはこう言った』を精読する④

## 深淵の思想 ——「幻影と謎について」に見る永遠回帰——

岩 下 眞 好

### (一)「重力の魔物」という道連れ

『ツアラトウストラはこう言った』の第三部の二番目の章は「幻影と謎について」というタイトルをもつ。この章では、至福の島を船に乗って旅立ったツアラトウストラが船に乗り合わせた人々に話して聞かせた物語を主な内容としている。章は二つの部分（1および2）から成るが、2に比べて非常に短い1の部分は、まず物語の枠の役割を担い、船内で初めは沈黙していたツアラトウストラが語り始めるまでの経緯を簡潔に述べている。だが、そのあと早くも1の部分でツアラトウストラの話が始まっている。それは、2の部分で物語られることになる「重力の魔物」との問答のいわば前置きとして、この魔物の姿を描き、これとツアラトウストラとの抜き差しならぬ関係に言及している。

石ころが剥き出しになった急な山道を上へ上へとツアラトウストラが登っているとき、ツアラトウストラの肩の上に乗っていたのが「重力の魔物」<sup>1)</sup>だった。この魔物は、ツアラトウストラの「不俱戴天の敵」で、急な道を夢中になって登るツアラトウストラの足を「下の方へ、深淵に向かって下の方へと引っ張る」<sup>2)</sup>存在だ。この「なかば小びとで、なかばモグラ」の「重力の魔物」とは、重力という物理的な「力」を擬人化して「魔物」と呼んだものであることは明白だ。この魔物は、ツアラトウストラがどこに行こうと、つねに必ず付きまとい離れない。旅人ツアラトウストラにとっては、迷惑な道連れ、宿命

な同行者だ。「重力の魔物」は、叡智の高みを指すツアラトウストラを高く投げ上げられた石にたとえて、どれほど高く投げられた石であっても必ず落下すると、重力の立場から揶揄する。魔物のこの言葉に深く打ちのめされ、「深淵」への落下に恐れをなすツアラトウストラだったが、いつの間にか持ち前の勇気が目覚め、「重力の魔物」と対決する決意が芽生える——「小びとよ、おまえか！ それともわたしか！」<sup>3)</sup>。勇氣は、ツアラトウストラを鼓舞して、敢えて「深淵」を直視するよう促し、「《これ》が生きるということだったのか。よし！ もう一度！」<sup>4)</sup>と言明して死の克服さえ可能にするのだ。

このあと、いよいよ2の部分に入って、「重力の魔物」に向かって語られるツアラトウストラの説話が始まる。ここでツアラトウストラが述べようと試みる「深淵の思想」<sup>5)</sup>こそ、この章の本題である永遠回帰の思想にほかならない。

## (二) ツアラトウストラの永遠回帰論

或る門の前まで来たとき、ツアラトウストラが足を止めると、「重力の魔物」は、ツアラトウストラの肩から飛び降りて道端の石の上にすわった。ツアラトウストラは、おまえにはこの思想を担うことができまいと言って魔物を挑発し、「深淵の思想」を説き始める。

門を通り抜けている道に注目してツアラトウストラは口火を切る。その門の上には「瞬間」という文字が掲げられている。ツアラトウストラの説話は、およそ次のようなものであった。

この門のところまで二つの道が出合っている。「この長い小道を戻れば——それは永遠に続いている」し、「あちらの長い小道を出てゆけば——そこには、また別の永遠がある」のだ<sup>6)</sup>。つまり、われわれの前方すなわち未来の方向にも、背後すなわち過去の方角にも、ひとつの永遠がある。したがって、前方に進むということは、背後に伸びている道を行ったときと全く同様の道をもう一度行くことにほかならないのではないか。「あらゆる事物のうち歩むことの《できる》ものはみな、すでに一度この小道を歩んだことがあるはずなのではないか。あらゆる事物のうち起こり《うる》ものはみな、すでに一度起こり、

行われ、そこを歩み過ぎたことがあるはずだ」と考えることができる<sup>7)</sup>。なぜなら「全ての事物は固く連結されている」ので、各瞬間は、過去に生じたことと全く同じかたちで「これから来るべきもの全てを引き連れているから」<sup>8)</sup>だ。

つまりツァラトウストラがここで提起しているのは、瞬間を起点に考えれば、過去に起こり体験しえた「出来事の連鎖＝シークエンス」と全く同じ「シークエンス」が、未来に向かう「シークエンス」として、逆方向にも伸びているということである。それはとりもなおさず「シークエンス」を、その始まりの時点、つまりその起源から捉えるのではなく、発想を完全に逆転させて、瞬間すなわち現時点から遡るかたちで捉えることを意味する。こう捉えるならば、過去に生起して順列をなしている「シークエンス」は、未来にも、同じ順列をなす「シークエンス」として現れるはずだというのである。起源があって、そこから出来事が起こってくるのなら、その展開は多様な様相を呈しうるだろう。しかし、瞬間から過去を見れば、過去の「シークエンス」は固定されている。むろん無限の彼方を起源とする過去がある以上、瞬間は起源ではない。したがって未来について考えるのは、過去にあったシークエンスが未来においてもあるというかたちでの未来にならざるをえないというロジックが生まれるのである。

これが、ひとまずツァラトウストラの永遠回帰論である。

### (三) 小びと＝「重力の魔物」の応答

「重力の魔物」は黙って話を聞いていただけだろうか。そうではない。ツァラトウストラが議論を始めて、門から前方と後方にそれぞれ永遠に向かって伸びる二本の道について、この二本の道は「互いに矛盾」し、「互いに反目」し合い、「瞬間」という名の門のところで、「出会っている」<sup>9)</sup>と説明し、「さて小びとよ、これら二本の道は永久に矛盾すると思うか」と尋ねると<sup>10)</sup>、それに対して「まっすぐなものは、みんな嘘だと蔑むようにつぶやいて」応じ、さらにこう続けている。「あらゆる真理は曲線であり、まさに時間そのものが円環を

なしているのさ」——<sup>11)</sup>。「重力の魔物」のこの言葉に、ツアラトウストラは、「軽はずみなことを言うな！」<sup>12)</sup>と激怒する。

ツアラトウストラは、なぜ怒ったのだろうか。「重力の魔物」の言葉は、なぜ「軽はずみ」なのだろうか。むしろ「重力の魔物」の発言はツアラトウストラの説明を補完しているようにさえ思える。一見したところ、両者の言葉には整合性がありそうだ。ツアラトウストラは、自分に先んじて「重力の魔物」が永遠回帰論を小賢しくも簡潔に要約してみせたことが面白くなかったのだろうか。そうではない。ツアラトウストラと「重力の魔物」のあいだには決定的な相違が横たわっているのだ。

「重力の魔物」が「あらゆる真理は曲線であり、まさに時間そのものが円環をなしている」と述べる時、この言い方は、対象を一定の時間的経過のなかで観察した結果として言明されている。だからこそ、「曲線」とか「円環」という変化図式を提起することができるのだ。言い方を変えれば、観察者（この場合は「重力の魔物」）は、当該の構造の外にいて、時間的経過のなかに把握できるその軌跡を眺め、それが描く形状を指摘しているのである。

これに対して、ツアラトウストラが語った永遠回帰論は、構造そのものを問題にしている。構造が時間的経過のなかで描く図式は問題にしていない。すなわち、永遠回帰を瞬間に生起する事柄として捉えている。全てを瞬間の相において眺めているのである。永遠回帰は、瞬間ごとに起り完結している。次の瞬間には新たに同じ永遠回帰が起り完結するのである。ツアラトウストラは、そのうちの任意の1回について語っているのだが、その1回が無限回にわたって生起完結しているのだ。これを先の言い換え方にしがたって観察者の立ち位置で説明すれば、これは当該の構造の内側からの視点とすることができるだろう。

では、なぜこの違いが重要なのか。それを考えてみよう。

すでに先に一度引用しているが、ツアラトウストラは「全ての事物は固く連結されている」ので、各瞬間は、過去に生起したことと全く同じかたちで「これから来るべきもの全てを引き連れている」<sup>13)</sup>と述べている。各瞬間において、全てが全く同じように連結されているというのが、永遠回帰論の本質であり、

そのロジックの全体を支える要であるのだが、同一物の同一の順列での回帰という原理は、永遠回帰を時間的経緯のなかで眺められるものとした場合には、過去に起こったことが、そのままの順序で永遠に繰り返されるといふ単なるお伽話となってしまう。永遠回帰を瞬間の相で捉える場合にのみ、永遠回帰が瞬間ごとに生起完結しているわけであるから、その瞬間ごとに同一物が同一の順序で回帰していると述べる事が可能となるのだ。

ツァラトゥストラが「重力の魔物」の総括に対して激怒したのは、このような永遠回帰論の本質にかかわる問題において、観方が異なっていたからなのである。

#### (四) 永遠回帰論の揺れ

永遠回帰論が最初に具体的に示されたのは『ツァラトゥストラはこう言った』よりも前に執筆された『悦ばしき知識』においてだった<sup>14)</sup>。哲学的アフォリズムや詩文からなるこの断片集の第三四一番のアフォリズムである。これには「最大の重し」というタイトルが付されている。ここでニーチェは、デーモンが現れて語る話というかたちで永遠回帰とはどのようなことかを物語として描写している。デーモンが現れて、おまえの人生を「もう一度、それどころか数えきれない回数にわたって生きなければならなくなるとしたら」どう思うかと問いかける。しかも、それは些細なものまでも含めた全ての人生が「同じ順序で連続して」繰り返されるといふかたち、すなわち同一物の同一の順序での繰り返しだといふのである<sup>15)</sup>。

ここで注目しておくべきことは、永遠回帰が時系列に沿った出来事のように語られていることだ。ニーチェは、これに続けて、もしこれを受け入れるならば、何かの行為を為すにあたって「これをもう一度、それどころか数えきれない回数にわたって欲するか」と自問することになると述べ、それが行為の「最大の重し」となるとしている<sup>16)</sup>。これは、いわば行為決定の究極的な判断基準を人間に与える仮説としての永遠回帰思想という性格もっている。この第三四一番のアフォリズムを、行為の選択基準を提供する実践的な寓話であると限

定して受け止めるならば、その限りでの永遠回帰論は、理解しやすい。ある意味ではロジックは単純であり、先に検討した『ツァラトゥストラはこう言った』第三部の「幻影と謎について」におけるそれとは大きく異なることは明白だ。

だが、この違いは、第三四一番のアフォリズムを含む『悦ばしき知識』の第四書までが執筆された1881年から82年夏と『ツァラトゥストラはこう言った』の「幻影と謎について」を含む第三部までが書き上げられた1884年までの短い間に、ニーチェの永遠回帰論が発展し深められたということをも必ずしも意味しない。両者は、永遠回帰論のどの点を前面に押し出すかの観点が異なるのだ。第三四一番のアフォリズムでも、「幻影と謎について」でも、永遠回帰において回帰するシチュエーションの実例としての月光のなかに蜘蛛が這うという不気味な光景は同一だ。ニーチェのなかには、同一のイメージがあったのだ。ただ、そのどこに光をあててクローズアップするかの観点が異なっていた。「幻影と謎について」にあっては、行為の選択基準の仮説としての永遠回帰という側面は後退し、永遠回帰という事象そのもののメカニズムを明らかにするという観点から、永遠回帰が説明されている。まただからこそ、すでに指摘したように、永遠回帰のメカニズムを瞬間の相において観るツァラトゥストラと、これを時間的経緯のなかで観る小びと＝「重力の魔物」との観方の違いが問題になるのだ。

こうした観点の違いから、ニーチェの永遠回帰論は或る種の揺れを呈している。そればかりではない。永遠回帰のメカニズムを説くという同じ観点に立った場合でも、そこには、それを瞬間において観るか、それとも時間的経過のなかで観るかという永遠回帰のメカニズム考察上の決定的なポイントの違いが無視されてしまうという危険が内包されているのだ。

それは、第三部の後半の「病から癒えつつある者」の章<sup>17)</sup>において、永遠回帰を蛇と鷲という「ツァラトゥストラの動物たち」<sup>18)</sup>が語るときの説明の言葉のなかに再び現れる問題である。ここでは、そのことを指摘しておくだけにとどめるが、この動物たちは、永遠回帰を語るにあたって「存在の車輪」という比喩を口にしてはいるばかりか、「永遠の道は曲線なのだ」と言い切っている。

これは先に問題にした「重力の魔物」の「幻影と謎について」での「あらゆる真理は曲線であり、まさに時間そのものが円環をなしているのさ」という発言<sup>19)</sup>と、永遠回帰を時間的経過のなかで観るという点において全く同じだ。そればかりか、なんとツァラトゥストラ自身がこの少し前のところでは自分を「円環の代弁者」と称してさえいる<sup>20)</sup>。このことについての詳細な吟味はのちに「病から癒えつつある者」の章を読解する際の課題となるが、永遠回帰を時間的経過のなかに観る図式として説明することに、そのわかりやすさと便利さのゆえに、気軽に無批判に進んでしまう危険があることは確かだ。

#### (五) 黒い蛇の頭を噛み切れ!

永遠回帰を瞬間の相において観ることが、永遠回帰を、その構造の内側から観る立場であることは、すでに述べた<sup>21)</sup>。ニーチェは、永遠回帰というものをシステムの外側から客観的に眺めようという立場を取らない。そうした特権的な観察者の立場を許容しない。自分自身も永遠回帰のメカニズムのなかに身を置いて、まさに永遠回帰を生き抜き、永遠回帰という宿命を、先にも引用したとおり「《これ》が生きるということだったのか。よし! もう一度!」と勇気をもって敢然とわが身に引き受けることこそ、ニヒリズムの「底」(Grund)なしの「深淵」(Ab-grund)に「根拠」(Grund)を与える「深淵の」(abgründlich)思想の実践にはかならないのだから。

「幻影と謎について」の章では、章の終わりでツァラトゥストラが報告する恐ろしい出来事によって、このことが印象深くシンボリックに物語られる。——犬が異様に吠えるので、ツァラトゥストラがその方に近づいてみると、一人の若い牧人がのたうちまわって苦しんでいた。「その口からは一匹の黒くて太い蛇が垂れ下がっていた。」<sup>22)</sup>眠っていたところに蛇がやって来て、喉の奥に入りこみ、噛みついたのだった。尋常ならぬ光景だった。

ツァラトゥストラが「その蛇を手でどんなに引っばっても——無駄だった。手で蛇を喉から引き出すことはできなかった。それで声を振り絞って叫んだ。噛むんだ! 噛むんだ! 頭を噛み切れ!」<sup>23)</sup>。

そしてツアラトウストラは「さあ、わたしが当時見た謎を解いてみたまえ。この孤独な者が見た幻影を解釈したまえ！ あれは、ひとつの幻影、ひとつの未来の予見だった」<sup>24)</sup>と船上で自分の話に聞き入る人たちに語りかけ、牧人がツアラトウストラの言うとおり蛇を強く噛み、蛇の頭を吐き出したことを告げて話を結ぶ。

このエピソードでは、黒い蛇が、永遠回帰が孕みうる負の可能性を暗示している。もともと蛇は鷲とともに、ツアラトウストラに忠実な動物であり、のちの「病から癒えつつある者」の章で、病に倒れたツアラトウストラを見守り世話をし、ついにはツアラトウストラに永遠回帰の在りようを歌い聞かせてくれる動物だ。だが、すでに考察したように、永遠回帰を瞬間の相で観るか、それとも時間的経緯のなかで観るかといったような一見したところでは似たようなことにも見えうる違いが、じつは重大な違いをはらんでいる。黒い蛇は、ツアラトウストラの友である蛇に外形は似ていながら（もし自分の尻尾に喰いついて丸くなれば円環のかたちすらつくって人目を翻弄することだってありうる）、全く別の危険な存在なのである。

黒い蛇は、牧人の口に頭を突っ込んで喉に噛みついて、この牧人を瀕死の危機に陥れる。この黒い蛇を「噛むんだ！ 頭を噛み切れ！」とツアラトウストラが絶叫したのは、こうした危険は外側から客観的に事態を観察することでは克服できず、その内側から生き身で事態と対決し、その頭を噛み切るほかにはないからであった。永遠回帰は生きられねばならない。

これが永遠回帰論のアルファにしてオメガだ。

永遠回帰論は、言葉のほんのわずかのずれや取り違いによってさえ大きな誤解を引き起こしかねない危険を内包している。おそらく危険は今回指摘したこと以外にもあるだろう。口の中に入り込んだ蛇の頭を噛み切って吐き捨てたという牧人のこの体験は、のちの「病から癒えつつある者」の章では、ツアラトウストラ自身の体験として語られている<sup>25)</sup>。永遠回帰論はなおも別の危険に晒されていてそうだ。別の問題に直面しそうだ。

## 注

本論文で底本とするのは以下のニーチェ全集である。

Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden.

当全集（KSA）について、および本論文における同全集からの引用については、本論文に先立つ以下の論文の注 1）に明記したとおりである。岩下眞好：『ツァラトゥストラ』における「力となる意志」（慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』第 137 号、2016 年）

- 1) Vom Gesicht und Räthsel. IV 197–202.
- 2) IV 198, Z.10ff.
- 3) IV 198, Z.34.
- 4) IV 199, Z.13f.
- 5) IV 199, Z.20.
- 6) IV 199, Z.28f.
- 7) IV 200, Z.15ff.
- 8) IV 200, Z.22ff.
- 9) IV 189, Z.30ff.
- 10) IV 200, Z.5f. 「永久に」というのは有限の時間的経過における図式的理解ではなく、構造上の指摘である。
- 11) IV 200, Z.7f.
- 12) IV 200, Z.9f.
- 13) IV 200, Z.22f.
- 14) [341.] Die größte Schwergewicht.  
In: Die fröhliche Wissenschaft, Viertes Buch. III 570.
- 15) ebd.
- 16) ebd.
- 17) Der Genesende. IV 270ff.
- 18) IV 27, Z.14.
- 19) IV 200, Z.7ff.
- 20) IV 271, Z.4.
- 21) 本論 30 ページ。
- 22) IV 201, 23ff.
- 23) IV 201, 30ff.
- 24) IV 202, 6ff.
- 25) IV 273, Z.9ff.

【付記】

『教養論叢』138号に、故 夫 岩下真好の「深淵の思想——「幻影と謎について」に見る永遠回帰——」が、ニーチェ研究その④として発表されましたことをとても嬉しく存じております。

昨年11月、体長が芳しくない中、何にも増して原稿執筆に力を注いでおりました岩下です。本人自身が大変喜んでいることと思います。残念でならないのは、次のテーマもすでに頭の中にあり、ニーチェ研究をさらに進めていくつもりでございましたのに、それを実現させることなく去ってしまったことです。生きて自分の研究を遂行してほしかった、いえ、そうすべきでしたのに……。

このような機会を私にお与えくださった編集委員会の皆様、これまでご尽力くださいました出版会の村山夏子様、心よりお礼申し上げます。

2017年1月

岩下久美子